

フィリピンにおける北部ルソン日系人社会の歴史的経験に関する研究
Historical Experiences of Japanese Immigrants and Their Descendants in
Northern Luzon, Philippines

研究代表者 森谷裕美子（九州産業大学国際文化学部教授）

1. 本研究の目的

現代は「国際移民の時代 (the age of migration)」といわれる。人の国際移動は、交通手段の発達や地域間の経済格差の拡大により、すでに 19 世紀末頃からみられるが、とりわけ 20 世紀後半から 21 世紀にかけての人の移動は、量的拡大だけでなくその内容も、経済的困窮を動機とする自発的な移民はもとより、国際難民や先進国における人口減少・高齢化対策として政策的に移民を受け入れようとする動きに対応した国際移動労働など、それが多様化・複雑化しているという点においてかつての国際移動とは大きく異なっており〔カースルズ・ミラー 2011〕、今や、これに付随して起こる摩擦や軋轢が、多くの国家や地域でさまざまな社会問題となっているのはいうまでもないだろう。

日本においても、現在の日本における移民の状況を数値でみる限り、入移民、出移民とも決して高くはないが〔OECD 2013〕、たとえ移民人口は少なくとも多くの外国人が日本で労働者として働いているという現状・実態があり、さらに第二次世界大戦以前には、日本もまた移民の供給源として重要な役割を果たしていた¹。1950 年代の高度経済成長を迎えるまでは、貧困にあえぐ多くの日本人が過剰な人口と就職難のなか、より高い賃金を求めて海外へと出稼ぎに出たのである。とりわけ多数の日本人が海外に進出した明治から昭和 16 年 (1941 年) にかけての移民の数は 776,000 人余りに上るが、そのほとんどは出稼ぎを目的としており、全体の約 98.7% が「出稼ぎ移民」と認められるという。しかも出稼ぎとはいっても、現実にはその大半が日本に帰ることはなかったようで、鈴木によれば、1990 年 10 月 1 日現在の海外永住日本人・日系人約 165 万人のうち、その多くがかつての出稼ぎ移民とその子孫であるという〔外務省領事移住部 1972b、鈴木 1992 : 261-265〕。

日本の戦前から戦後にかけての移住先については、19 世紀後半においては北米、中南米が中心であったが、19 世紀末には新たに東南アジアがその移住先として登場するようになり、本研究で取り上げるフィリピンもまた多くの日本人が海外出稼ぎ労働者として渡っている〔外務省領事移住部 1972b : 137、143〕。しかし、これまでの日系移民研究のほとんどはアメリカやブラジル、ハワイに関するものであり、戦前、フィリピン各地にいくつもの日本人のコミュニティが形成され、その多くが現地の人々と結婚したり、そこで豊かな生活を送っていたりした。しかし、こうした事実を知る者はきわめて少ない。

¹ その数は明治から昭和の初期にかけて約 80 万人にも及んだ〔鈴木 1992 : 4〕。

これらの移民たちは、「移民」と一言でいっても、移住先となった社会でそれぞれに異なる経験をしているのであって、本研究でとりあげるフィリピンもまた、北米、中南米の移民とは大きく異なる。こうした多様な国際移民の実情を把握し、それを経済的側面だけでなく社会的影響と併せて考察することは、海外からの研修生の研修期間延長や家事労働者の受け入れなども検討されている昨今、グローバル化された世界における日本の今後の見通しを立てるうえで重要な意味をもつに違いない。

そこで本研究では、これまで、もっぱらアメリカ研究、ハワイ研究として行なわれていた日系移民研究を、そうした地域とは異なる特徴をもつフィリピンの日系人²社会の事例を分析することで、多様な移民問題の実情を明らかにする。具体的には、最初のフィリピンへの集団移住者で、ルソン島北部のベンゲット道路の建設に携わった「ベンゲット移民³」を扱う。ここでベンゲット移民を取り上げるのは、主として、彼らがフィリピンへの集団移民の先駆者でありその後の移民の流れを作り出したということ、そして彼らのなかには現地のフィリピン人と結婚して子どもをもうけた者も多く、現地社会の人々と比較的良好な関係を築きあげていたという事実による。

当時のフィリピンへの日系移民は、とりわけ先住民族が多く住む地域においてはその多くが先住民族の女性と結婚しており、そこで彼や彼女らとともに勤勉に働いた。また熟練労働者であった移民たちは、先住民族たちにその技術を惜しみなく教えたが、社会で突出するわけでもなく、むしろ彼らの伝統的な文化を尊重し、自ら儀礼を実修したり、それに参加したりすることで彼らと良好な関係を築いていたという。しかし、太平洋戦争の勃発はこの地の日系人たちや無関係なフィリピン人たちをも巻き込むことになり1世はもとより、先住民族を母にもつ2世までが軍人や軍属として戦闘への参加を余儀なくされた。やがて終戦を迎え1世や両親とも日本人の子どもたちは本国に強制送還されるが、フィリピンに残留した先住民族の妻やその子どもたちは、戦後の強い反日感情のなかで日本人との関係を隠して暮らしていかなければならなかったという。このように歴史に翻弄され、数奇な運命を辿ることになった日系人や先住民族の妻たちが移住先

² ここでいう日系人とは、(財) 海外日系人協会の定義に従い「日本から海外に本拠地を移し、永住の目的をもって生活している日本人ならびにその子孫の二世、三世、四世などの人々で、国籍、混血は問わない」を意味することとする (<http://www.jadesas.or.jp/aboutnikkei/index.html>、2015年12月25日アクセス)。ただし、戦前フィリピンに渡った日本人の場合、ほとんどは永住というより短期の出稼ぎ労働を目的とするものであった。しかし、フィリピンの女性と結婚し、あるいは太平洋戦争によって家族が離散したことで期せずしてフィリピンに永住することとなった日系人も多い。そのため、ここでは当初の目的が永住であったかどうかを区別せず、「戦前にフィリピンへ渡った日本人ならびにその子孫」を総称して「日系人」と呼ぶこととする。

³ 狭義のベンゲット移民とは、日本出発前からベンゲット道路工事に従事することを目的としていた労働者のことだが、実際には、それ以前に自由移民としてフィリピンに渡り他の仕事に従事していたが、そこでベンゲット道路工事で労働者を募集していることを知ってバギオにやって来た者も多くいるため、一般には、この工事に従事したすべての日系人をさす〔早瀬 1989a : 89〕。

の環境や社会、経済、文化とどのように交差したのかを多面的に研究することは、今日のさまざまな移民問題を考えるうえで、大きな示唆を与えるものとなるだろう。

2. フィリピンへの出稼ぎ労働

(1) ベンゲット移民

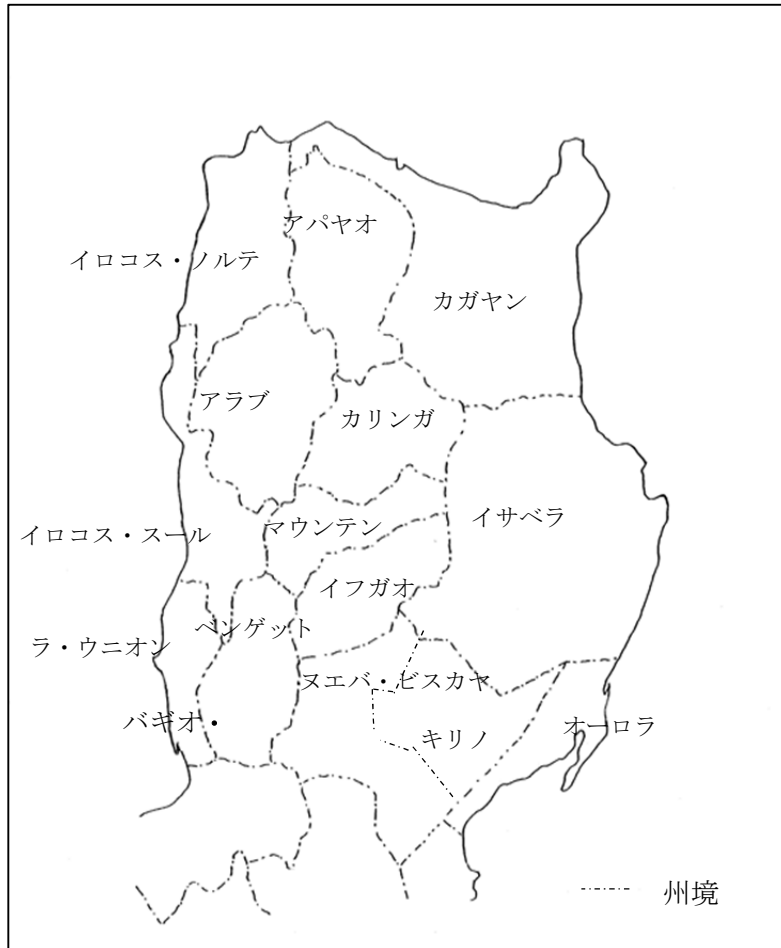
フィリピンへの移民が最初に日本政府の統計に表れるのは 1899 年であるが、当時、フィリピンに正式に移民として入国するためには熟練労働者による「自由移民」でなくてはならなかった。そのため、まだ渡航者の数は少なく散発的であったが、フィリピンの植民地宗主国がスペインからアメリカに代わったことで、その後、多くの日本人がフィリピンへ渡って行くようになった。その直接のきっかけとなったのは、ベンゲット道路 *Benguet Road* と呼ばれる道路の建設で、アメリカはルソン島北部にあるベンゲット州 *Benguet Province* のバギオ *Baguio* (図 1) を「避暑地・夏の首都」として開発しようと考え、その一環としてマニラとバギオを繋ぐベンゲット道路の建設を進めた。しかし、1901 年に着工したものの急峻な山岳地帯での工事が難航を極めたため、1903 年に日本人労働者の導入に踏み切り、これを契機に移民会社を通して多くの日系人が出稼ぎ労働者としてフィリピンへ渡ることとなった。鈴木によれば、アメリカの日本人にたいする需要は高く 1904 年には 8 つの移民会社から延べ 4,800 人近い求人があるという。このうちの 3,500 人はベンゲット道路向けであったという。特にベンゲット道路工事での給料は当時の日系人にとっては破格の高給であったので、マニラまでの渡航費は自己負担であったが、希望者は多かった〔鈴木 1992 : 186-194〕。

先にも述べたように、このベンゲット道路建設に携わった人々を「ベンゲット移民」と呼ぶが、彼らがその後のフィリピンへの移民の流れを作り出した最初の集団移民である。このベンゲット道路は 4 年以上の歳月をかけて 1905 年に開通するが、そもそもベンゲット道路の工事に従事するために来比していた彼らはこれで職を失い、その多くは帰国したが、残りは別の職を求めてルソン島西部のオロンガポ *Olongapo* や中部ビサヤ諸島のパナイ島イロイロ *Iloilo* などフィリピン諸島各地へ散らばっていき、そこで大工や農業労働者などに転じた⁴。いっぽう、ベンゲット道路工事の御用商人であった太田恭三郎は、工事が終わればその多くが失職することになると知り、当時、マニラ麻の栽培が盛んになりつつあって労働力不足に悩んでいたミンダナオ島のダバオ *Davao* へ道路完成の前から数度に亘ってベンゲット移民を送り込み、その後のダバオの日系人社会

⁴ とりわけ工事の落成した 1904 年 12 月には 1,500~1,600 人の日系人が一度に失職しマニラに下ったが、その多くは言葉がわからず職を求めるのに困った。しかし食わずにはいられないため、多数が石炭揚げとして雇われていったという〔ダバオ日本人会 1993 : 140〕。もちろん、そもそもベンゲット移民の多くが出稼ぎ労働者として渡比したのであって、少し蓄えができたらずぐに帰国した者もいなかったわけではない。また、日露戦争に召集されるのを避けるためにフィリピンへ来た移民たちは戦争終了後、直ちに帰国したという。

発展の礎を築いた。やがてダバオではこのマニラ麻の栽培が軌道に乗り、戦前には、そこにアジア最大の日系人町が形成されることとなった〔大野 1991 : 4-7、蒲原 1938 : 57-60〕。

図1 北部ルソン地域



(森谷 2004 より加筆して転載)

(2) バギオの発展と日系人

いっぽうバギオでは、ベンゲット道路の完成後もさまざまな開発が進められ、次々と郡庁舎やその関連施設、病院、スポーツ競技場、教会などが作られ、外国人やマニラの有力者たちがここに別荘用の土地を買い求めるようになった〔早瀬 1989b : 109-111〕。ベンゲット移民のなかには、道路完成後もバギオ周辺地域にとどまった者もあり、彼らはこうした新たな開発の担い手として大工や石工、製材工、測量技師、庭師としてアメリカ人に雇われ、さらにバギオの開発が進むと、今度はアメリカ人の経営する鉱山や製材所で大工や製材工として多くの日系人が雇われるようになっていった〔Afable 2004b : 31-46、52-53〕。

やがて日系人たちの仕事ぶりが認められ、1910年頃には安定した仕事を得ることが

できるようになるが、だんだんとバギオで日系人が活躍するようになると、今度は初期の移民が同郷の若者を呼び寄せる形で新たな移民がやって来るようになった。特にフィリピンでは同県、同郷人の結びつきが強く、誰かが渡比して成功したとなるとその伝を頼って次々に移住者が出たが⁵、ベンゲット道路工事後は単純労働者の受け入れが厳しくなったため、こうした新規移民のほとんどは大工その他の熟練労働者であったという [Afable 2004b : 31-32、ダバオ日本人会 1993 : 150]。ベンゲット移民と異なり、これらの新規移民には商業に携わる者も多く、日系人の労働者や避暑にバギオを訪れる観光客をターゲットに、1910～30年代にかけてバギオの中心部で商店や床屋、写真スタジオ、レストラン、旅館、病院などの営業を始めるようになっていった。また、バギオの郊外では製材工や大工などとして働く日系人たちの集落が形成され、やがて彼らは本業の傍らそこで野菜を栽培して市場で売ようになり、1910年代末になってマニラへの野菜の供給ルートができあがりバギオ野菜の需要が高まると、今度は、より広い土地に移り住んでそこで大規模な農業経営を行い、それを主たる生業とするようになっていった。

こうしてバギオが都市として発展するにつれ、新たな日本人移民が次々にこの地に仕事を求めて訪れるようになり、最盛期にはバギオに1,000人を超える日系人社会が形成されたという⁶ [Afable 2004b : 54-55]。

アメリカは、バギオのインフラの整備やマニラからバギオへの交通網が整うと、今度はコルディエラ山脈地帯 Cordillera Mountain Range を、ボントック Bontoc を州都とする一つの州、すなわちマウンテン州 Mountain Province⁷として組織すべく法整備を行った。そして1908年にマウンテン州が成立すると、今度はボントックがその州都として機能するのに必要なインフラの整備に取り掛かり、そのため多くの日系人たちが大工や土木作業員としてこの地に送られていった [Afable ed. 2004]。いっぽうこの頃、アメリカ聖公会 (Episcopal Church in the United States of America) がマウンテン州で布教活動を開始し、1920年代にかけて教会関係のさまざまな施設をここに作ったが、これにも多くの日系人がかかわった [Botengan 2001 : 15-20] (写真1、2)。

⁵ 新規移民には、バギオで成功した人たちの出身地である福岡、福島、熊本、山梨の出身者が多かった [Afable 2004b : 51]。

⁶ 1939年のバギオ人口24,000人のうち日系人は1,064人、中国人は1,114人、アメリカ人612人、ヨーロッパ人143人だった [Afable 2004b : 54-55]。

⁷ 当時のマウンテン州はベンゲット Benguet、レパント・ボントック Lepanto-Bontoc、アンブラヤン Ambrayan、カリंगा Kalinga、アパヤオ Apayao、イフガオ Ifugao の6つの亜州で構成されていた。その後1920年にアンブラヤンは隣接する州の一部に、レパント・ボントックはその領域の一部が隣接する州や亜州に分割されてボントックとなり、1966年にはマウンテン、ベンゲット、カリंगा・アパヤオ、イフガオがそれぞれ独立した4州として改編された。さらに1995年にはカリंगा・アパヤオが分離して2つの州になり現在に至っている (図1)。また、バギオはベンゲット州領域内にあるが、現在は高度都市化市 (Highly Urbanized City) として行政的には完全に州から独立している。なお混乱を避けるため、本稿では特に断りのない限り、言及する地域については現在の行政区分を用いている。

写真1 日系人によって建てられた教会



(筆者撮影)

写真2 教会裏地の墓地に残る日系1世の墓



(筆者撮影)

3. ベンゲット移民と異民族間結婚

(1) 日系人社会の特質

1910年頃のフィリピンの日系人はこのバギオとマニラ周辺、麻栽培に従事するダバオに集中して住んでおり、そこで比較的安定した生活を送るようになっていたが〔外務省通商局 1911〕、とりわけ先祖伝来の土地で伝統的な生活を営む先住民族が多く住んでいたバギオやダバオ⁸周辺では、日系人と先住民族との間にさまざまな交流や摩擦がみられた。

かつてフィリピンを植民地支配したスペインやアメリカは、もともとフィリピンに住んでいた人々を西欧的な価値尺度でもって「非キリスト教徒ないしは野蛮な部族 (Non-Christian / Wild Tribes)」として扱い (Census of 1903, Vol.1 : 22-23)、自分たち植民者と「キリスト教徒ないしは文明化された部族 (Christian / Civilized Tribes)」とを区別して、その相対的価値を評価しランク付けた〔ラファエル 2004 : 150-154〕。そうした観念は、やがて「白人優位の神話からアジアを解放し、大東亜共栄圏を建設する」という大義名分を掲げ、アメリカからフィリピンを「解放」するためにフィリピンを占領した日本人にも継承された。日本は、それまでの社会秩序に日本人・日系人というカテゴリーを新たに加えたが、当時の在留邦人社会は「日系人」と一言でいっても一様ではなく「2~3年の駐在で帰国していくエリート的日本人」と「永住覚悟で住みついたろくに学歴もない無告の民の集団」の二重構造がみられたことから、日本人・日系人もまた日本軍人、文官、内地から派遣の大会社の社員、それを戦前から居住する日系人⁹とにランク付けされ〔矢野 2009a(1975) : 92-93〕、その下にキリスト教徒フィリピン人、華僑、イスラーム教徒、先住民族を置く序列を作り上げた〔早瀬 1996 : 322-323〕。

北部ルソンの日系人社会においても、初期にベンゲット移民としてやってきた者の多くは「手に職のない寒村出身の農民で、主に肉体労働に従事することを目的に3年間の契約で単身フィリピンへ渡った人々」であり〔早瀬 1989b : 137〕、彼らはそれまでフ

⁸ ダバオはもともとミンダナオ島の先住民族であるバゴボ族 Bagobo の住む土地で、Hayase によると、ダバオの日系人社会は、バゴボ族との関係において、第一次世界大戦の好景気によってダバオに大量に日系人が流入する時期の前と後では大きく異なっており、比較的早い時期にダバオにやって来た日系人は親密に彼らと交流していたが、それ以降の日系人は公有地払い下げによって大規模にマニラ麻の栽培を行う日系人が経営する会社の社員としてやってきた人々と、バゴボ族の地主に土地を借りて栽培を行っていた自営業の人々の2つのグループに分かれ、前者がバゴボ族とほとんど交流がなかったのにたいし、後者は彼らとの関係が深くバゴボ族の女性と結婚する者も多くいたという〔Hayase 1984〕。

⁹ いっぽうダバオでは、移民の多くが沖縄出身者であったが、当時、本土の日本人は沖縄出身者にたいして根強い差別意識や偏見を抱いており、それが海外の邦人移民社会でも温存されたため、フィリピンでも沖縄出身者は「二級の日本人」とみなされがちであった〔大野 2006 : 7-9〕。そこで、こうした序列化においても、沖縄出身者は戦前から居住する日系人のなかでも、内地出身者の下に位置づけられたという〔早瀬 1996 : 322-323〕。

フィリピン人がみたスペインやアメリカの支配者より体格や品格の面ですっと見劣りし、また白人がすることのなかった肉体労働に従事していたため、フィリピン人の尊敬の対象になることはなかった〔早瀬 1996 : 293-294、322-323〕。しかし1920~30年代にかけて、日本の近代化に伴いフィリピンへやって来る日系人の社会的背景が変わり始めると、バギオにも新たなタイプの移民がやってくるようになった。こうした新規移民は教育のある、専門的な技術や資本をもつ者たちで、彼らはその利点を生かしてバギオの市街地で商業活動に従事し、比較的豊かな生活を送る者が多かった。そのため、バギオでも商業、農業、大工、技師などといった職業や出身地にもとづく社会の分化や階層化がみられるようになり¹⁰、とりわけ新たにやってきた熟練した技術をもつ日系人と居残ったベンゲット移民との間には格差が出たようで¹¹、これを嫌ったと思われるベンゲット移民の一部が、州政府の公共工事や教会関係の仕事を求めて、さらに北の地へと移動した。先に述べたマウンテン州の州都を中心に大工や土木作業員として送られていった日系人の多くは、こうした人々であると推察される。

(2) 異民族間結婚

アメリカによって急激な開発が進められた北部ルソンはコルディリエラ山脈の広がる急峻な山岳地帯で、古くから、主としてベンゲット州にはカンカナイ族 **Kankanay**、イバロイ族 **Ibaloy**、アパヤオ州にイスネグ族 **Isneg**、カリंगा州にカリंगा族、マウンテン州にボントック族、イフガオ州にイフガオ族、アブラ州にティンギャン族と呼ばれる先住民族が住んでいた¹² (図 1)。しかし、これらの開発が進むにつれ、彼らは先祖伝来の土地の多くを「公有地」として没収され、次第に生活の基盤を失っていった。さらに、それまで「伝統的な」生活を維持してきた先住民族社会にも、植民地支配によって急速な貨幣経済の波が押し寄せ、多くの先住民族がバギオに現金収入を求めて出稼ぎにやって来るようになって、さして日本に帰国したいという願望も強くなかった日系

¹⁰ ただし、マニラと比べると大手の銀行や商社の進出もなく出張社員と地元の在留邦人というような区分がなかったこと、従って貧富の格差もほとんどなく比較的まとまりのある小日本人社会が形成されていたこと、親は商売よりも野菜栽培や大工といった「生産」に従事している者が多かったことなどから、マニラのように大きな貧富の差はなく、総じて豊かであったという〔小島 1993〕。

¹¹ もちろん商業従事者や大規模な農業経営によって経済的に成功した者のなかには、かつてベンゲット移民だった者やベンゲット移民への小売業から功をなした者もいるが (cf. **Furuya 2004**)、その数はあまり多くない。

¹² 彼らは、紀元前 1500 年~後 500 年にかけてフィリピン諸島へ渡ってきた古マレー系の先住民族で、しばしばイゴロット **Igorot** と総称されるが、これは、かつてフィリピンを植民地支配したスペインが自分たち「文明化された社会」とは異なる「エキゾチックな他者」として彼らを包括した用語であり、そこには幾分、差別的な意味合いが含まれている〔**Scott 1969 : 154-172**〕。

人男性と出会い、そこで、多くの異民族間結婚が生まれた¹³。また、バギオ郊外に形成された日系人の大規模農園でも多くの先住民族の男女が雇用されていたが、ここでも日系人たちはそうした先住民族女性と結婚したという〔金ヶ江 1968 : 369、Afable 2004b : 47-48〕。こうした結婚は、北部ルソンに生活の基盤を築く上で不可欠な生業戦略のひとつであったが、とりわけ農業を営む日系人にとっては、アメリカ人を除く外国人が個人で土地を所有したり経営したりすることを禁じた「フィリピン公有地法」のもとでも、妻や妻の親族が所有する土地を利用することで大規模な農業経営を行うことが可能となった¹⁴〔大野 2008 : 139-140〕。さらには、インフラ整備のために北部ルソン各地で橋や道路の建設が行われるようになると、そこへも多くの先住民族の女性がそこで働く日系人相手に商売をしようとやって来て、それが新たな日系人男性と先住民族女性の出会いの場を提供した〔Afable 2004b : 47-48、52、金ヶ江 1968 : 369、三吉 1942 : 32-33〕。

このように、北部ルソンの開発のさまざまな場面で日系人と先住民族の結婚がみられるようになるが、とりわけ先住民族の女性の多くは「大胆で冒険家」であったので、親族や近隣の村の人々がベンゲット州に出稼ぎに行ったのを聞きつけると、今度は自分たちとばかりにそれに倣って、より良い暮らしを求め、こぞって遠方まで出稼ぎに行った。また、すでに日系人と結婚している先住民族の妻たちが自分の親族や近隣の人々を別の日系人に紹介するといったこともしばしば行われ〔Tamayo 2004 : 252〕、それがこれらの異民族間結婚を促進したと考えられる。その実際の正確な数は分からないが、北部ルソンの日系人会の組織である北部ルソン比日基金 *Filipino-Japanese Foundation of Northern Luzon, Inc.* の調べでは、戦前日系人が多く住んでいたバギオおよびその周辺のベンゲット州、マウンテン州、イフガオ州およびカリングガ州において、115名の日系人が現地の先住民族と結婚しその子孫をフィリピンに残したことが明らかになっている〔Afable 2004a : xxiv〕。また 1936 年頃には、ボントック付近だけでこうした先住民族女性との間に生まれた子どもが 48 人いた〔金ヶ江 1968 : 693〕。いっぽう日系人が大規模な農業経営を展開したバギオ郊外の「トリニダッド在住、日農七十八戸の中、二十余戸の農夫はナバロイ土人¹⁵を妻とし、その間に数十人の子どもが生まれ、数軒の所にあるバギオの日本小学校に通学させ日本式の教育を授けて」いたという記載もあり〔三吉 1942 : 32-33〕、ここでもかなりの異民族間結婚があったことは推測できる。

¹³ ピーク時で約 4,000 人の労働者が働いていたベンゲット道路の工事でも、その荷役として多くの先住民族が雇われていた〔Tapang Jr. 1985 : 36〕。そのため、ベンゲット移民で若くして単身で赴任した男性のなかには、そこで先住民族の若い女性と知り合って結婚した者も多かったという〔金ヶ江 1968 : 690〕。

¹⁴ ダバオでも、バゴボ族の地主に土地を借りてマニラ麻の栽培を行っていた自営業の人々にバゴボ族の女性と結婚する者が多くいた〔Hayase 1984〕。

¹⁵ イバロイ族のこと。バギオのあるベンゲット州はもともとイバロイ族が住む土地であり、同じベンゲット州に住むカンカナイ族や隣接するマウンテン州に住むボントック族と結婚する日系人が多かった。

こうして多くの日系人が先住民族と結婚した理由については、先に述べたような経済的理由の他に、フィリピンへ渡った日系人の男女比率が極めて不均衡であったことがあげられる〔大野 2008 : 140-141〕。外務省通商局による『移民調査報告 第六回』によれば、バギオでもそうした男女比の不均衡は顕著にみられ、1910年の日系人の総数は1,919人であったが、そのうちの女性は399名に過ぎず、しかもそのほとんどがマニラおよびその周辺に居住していた(222名)。いっぽうバギオ周辺では男性が178名であるのにたいし、女性はわずか8名である〔外務省通商局 1911 : 105-111〕。また、両者の身体的、文化的類似性もこうした異民族間結婚を促した理由の一つとしてしばしば指摘される。たとえば蒲原は、北部ルソンの先住民族は「色こそ黒いが其の容貌、風俗、習慣等が日本人に酷似しているところから16世紀頃マニラに多数移住していたといわれている日本人の子孫であろうとの伝説もある」と述べており〔蒲原 1938 : 46-847〕、また金ヶ江は「全島に点在している20数種といわれる他の蛮族とは言語、風俗、風習が全く異なっており、日本の古代にみられたような萱葺の家に囲炉裏を切って住み、先祖代々に亘って山腹に階段式の棚田を耕して農耕をもって生活の基本としている。体格も日本人に似て胴長で足が短く、性質は精悍で武勇を尊び、礼儀正しくて正直である。(中略) しかも彼らは日本人と同じく天孫降臨の神話と伝説をもつ」と指摘する〔金ヶ江 1968 : 373〕。これらが真実かどうかは別として、そうした類似性が、日系人が先住民族を妻にする事にたいする抵抗を少なくしたようであり、また先住民族からみても日系人は同じ東洋人(Orientals)であり、両者の文化が似ていることから親しみやすいと感じていたようである〔Villarba-Torres 1991 : 146〕。

このような異民族間結婚は、外国人居留者が多いバギオでは決して珍しいことではなく、アメリカ人やスペイン人、中国人なども同じようにこの地で先住民族と結婚したという。しかし、実際には、日系人とともにベンゲット道路の工事に参加し、後にバギオで新たな生活の基盤を築いた中国人と比べると、日系人、とりわけ新規の移民は先住民族ではなく日系人と結婚することが多かった〔Yu-Jose 1997 : 14〕。先にも述べたように、バギオ周辺の日系人社会も決して均質ではなく、比較的早い時期に短期の出稼ぎのためにやってきた日系人にたいし、1920~30年代にやって来た新規移民の多くは、もともと夫婦揃って来比したか、日本から花嫁を迎えて結婚したかのいずれかで、そうした夫婦は妻が先住民族の日系人とは異なり日本にいるのとさして変わらない、むしろ日本よりも豊かな家族生活をバギオで営んでいた。これにたいし鉱山や製材所の労働者や郊外で農業経営に携わっていた人々、あるいは遠く離れた山岳地帯で公共工事にかかわっていたような人々は、花嫁を日本から迎えるほどの経済的余裕はなく、その多くが先住民族と結婚していることが分かる〔Hamada 1983 : 24〕。1939年のマウンテン州にかんする国勢調査(Census of the Philippines : 1939)をみても、日本人(日本国籍保有者)全体の数が1,188人で、そのうち女性は453人と比較的多いが、そのほとんどは新規移民が多く住むバギオとその近隣のベンゲット州に集中しており、これにたいしてボントックやイフガオなどに住む女性の数は極端に少なく、このことからそれが裏付

けられる (表 1)。

表 1 マウンテン州在住の日本国籍保有者

行政区分	日本国籍保有者	男 性	女 性
マウンテン州全体	1,188	735	453
アパヤオ	0	0	0
ベンゲット	1,117	688	429
ボントック	57	39	18
イフガオ	8	6	2
カリंगा	6	2	4

(*Census of the Philippines, 1939* より筆者作成)

(3) 日系人の妻としての先住民族と日系 2 世

こうした異民族間結婚において、日系人の夫と先住民族の妻との関係は、日系人や在留邦人の残した記録や手記をみる限り比較的良好であったようで、概して女性たちは「夫が作った野菜を毎朝早くから頭に乘せてバギオの市場に運びそこで販売するなど勤勉に働き、「日本の農家の夫人と少しも異なるところがなく、夫婦間にいざこざがおきたという例は、かつて一度も聞いたことがなかった」という〔金ヶ江 1968 : 691〕。また、日系人の夫も日系人の妻と変わらない敬意をもって彼女たちに接していた〔Hamada 1983 : 22〕。しかし、こうした先住民族と近い関係になかった在留邦人による 1910 年 4 月の「バギオ在住の土人の婦女と結縁せる者」にかんする調査報告では、先住民族の妻について「蕃種に属し教育なければ自己の年齢すら知らざる程にて衛生思想を缺く、然かも母語の外多少西語を解し能く夫に仕え農事を助け傍ら行商をなす、芋を常食とし偶々米飯を炊く、犬の丸焼は最も好物にして玄米製の濁酒を飲用す」や「農事を助け家庭頗る圓滿なるが如し」、「夫婦の間柄睦ましく」などと説明されており、そこでは夫婦の良好な関係が強調され夫によく仕える理想的な妻として描かれるいっぽうで、その未開性も指摘されている〔外務省通商局 1911 : 118-120〕。

こうした異民族間結婚で生まれた 2 世については、日系人が増えるにつれ日系 2 世の「日本人としての教育」の場の必要性を訴える声が日系人たちから上がるようになり、1921 年に結成されたバギオ日本人会によって 1925 年に日本人小学校が開校され、そこで両親とも日系人の子どもと母親が先住民族の子どもがいっしょに「日本人」として教育を受けることになった。ここでは教員が「土人を母とし、日本人を父とせる混血児

の数は全生徒の四割を占めているが、この人たちは純粹の日本人に比し学業の成績は劣る。放課後復習をするにしても、予習をするにしても、母親の手では教習ができない。(中略) 且つ混血児の欠点は、礼儀を知らず、穢埃気に留めず、進取の気性少なく、推理の力なく、熱心が乏しい」と感じてはいたが、日本人生徒は「自分たちは日本人であるという自覚が強いが、良いことには自分たちと混血児との差別を設けず、互に融和」していたという〔三吉 1942 : 24-25〕。また、当時の日本人学校の教員や同級生の回想においても「差別はなく友好的関係が築かれていた」ことや「先住民族の親たちも遠慮をしたり控え目でいたりすることは全然なく明るかった」など、しばしば両者の良好な関係が語られる〔三吉 1942 : 25、小島 1993、Tamayo 2004 : 254〕。しかし、実際にはまったく差別がなかったわけではなく、とりわけ 1930 代以降、「南洋」にたいする蔑視的な見方をもって渡比した日系人は、同じ日系人でもフィリピン人と結婚した者やその子どもを下にみる傾向があったため¹⁶〔早瀬 1996 : 322-323〕、北部ルソンでもこうした先住民族を母にもつ子どもはいくぶん差別的に「間の子」とか「混血児」と呼ばれていた〔Tamayo 2004 : 254〕。しかし日本人学校の教員からみれば「その頃は、外地なので大和魂を子どもたちに芯から深く植え込むことが第一」であり、内地以上にこの意気込みを以て教育に臨んだが、特に「混血の方が多かったので、(彼らを) 何としてでも大和魂をもって立派な日本人に仕立てるのが私たちの義務であると思い」、彼らを「本当の日本人」にすべく厳しく指導した。こうした日本精神の同化教育が「純粹の日本人のほうが混血よりも一段高いという父兄の間にあった偏見を除くのに寄与した」のだという〔小島 1993 : 87〕。

4. 「想像の共同体」としての日系人社会とその崩壊

(1) 「日系人」としての生活

戦前、北部ルソンへ渡った日系人の多くが先住民族の女性と結婚したことはすでに述べたが、その多くが夫婦とも「日系人」の家族とともにそこで日系人のコミュニティを形成し、日系人としての生活を営んでいた。そうした生活の中で先住民族の妻たちは若くて無教育ではあったが、頑健で働き者で、家族を扶養するために働く夫と同じくらい勤勉に働いて家計を支え、それとともに日系人男性が現地で生業活動や社会に適応する

¹⁶ 矢野は、この時期の平均的日本人にとっての南洋観、すなわち「南洋は密林に猛獣や野鳥どもが横行し、黒い首狩り人種が住む野蛮地域である」とするような見方を「冒険ダン吉シンドローム」と呼んだ。「冒険ダン吉」とは、南洋の島に漂流した少年ダン吉が島の王様として君臨するというストーリーの漫画で、少年向け雑誌に 1933~39 年に連載され人気を博したが、戦後は南洋の人々を差別的表現で描き、帝国主義を称賛している漫画だということで批判された。日本人の「南洋」にたいする蔑視的な見方が定着するのはまさにこの頃であり、この「冒険ダン吉シンドローム」を基礎として昭和の日本人の南進カルチャーが形成されたという〔矢野 2009b(1979) : 286-288〕。

ための「仲介者」としての役割を果たした〔Afable ed. 2004、Tamayo 2004 : 252〕。

いっぽう、たとえ先住民族であっても、彼女たちのそこでの日常生活はまさしく「日本人」としてのそれであり、子どもたちには日本の名前を付け、味噌や醤油、豆腐、海苔、梅干し、おにぎりなどといった日本の食物を食べ、日本酒を飲み、箸を使い、草履や下駄を履き、着物を着、畳を敷いて生活し、風呂に入り、日本の年中行事を祝っていたことが分かる〔Tamayo 2004〕。また、常に日系人男性は家族の中心であり、父親は家を清潔に保ち、躰に厳しく、勤労を尊び、たとえ子どもであっても家族の一員として与えられた役割を責任もって果たすようにさせた。そして毎日勤勉に働き、週末や一日の労働の後でさえ時間をみつけては家具を作ったり、野菜畑や水田の手入れをしたり、さらには小さな商売を始めたりした。そして、その妻もまた日系人の家庭では家計を助けるために勤勉に働かなければならなかった。しかし、それは先住民族社会でもあたり前であったので、さして苦ではなかったという〔Tamayo 2004 : 255-257〕。

このような戦前の日系人家庭の様子は、2世や3世によって語られる典型的なものであり、そこではとりわけ、家長である日系人男性を中心とする勤勉で実直な「家族の生活」が強調され、そこでの先住民族の女性は日系人の理想的な妻であったとみなされる。そして、2世や3世の多くがここで勤勉さや忍耐、躰の重要性を両親から学び、それが今も自分たちにとって最も大切な財産となっていると口をそろえていう。

こうした「勤勉で忍耐強く、よく躰された日本人」のイメージが、日系人男性を家父長とし、日本人と文化的に似通った「男性よりも劣位におかれること」をよしとする働き者で健康な先住民族の妻や、夫婦ともに日系人の家族によって〔Villarba-Torres 1991〕、日々の日系人コミュニティでの生活の中で強化され再生産されていった。すなわち、国際移動労働によって異国の地に形成された「想像の共同体」としての日系人社会は、戦前の北部ルソンの場合、移住先に日本の文化を持ち込む形でコミュニティを形成し、そこでは、こうした家父長家族における妻や家族のあるべき姿が、日系人社会という想像の共同体を「自己の帰属するものと思い描く」共同幻想を成り立たせるための小道具として働き、これが、日本人学校による「彼らを「本当の日本人」にしようとする日本精神の同化教育」と相まってこれを維持・発展させてきたといえる。もちろんそれは先住民族の人々に「日本人らしさ」を強いるものであったが、先住民族にとって日系人は、ここでは「他者」として排除すべき異質な存在ではなく、バギオという歴史的に開かれた文化的に多様な世界において、その文化を戸惑いながらも柔軟に受け入れてきた。いっぽうバギオの日系人にとって、先住民族はこの地で生きていく上での重要なパートナーであり、とりわけ彼らと結婚した日系人にとっては「家族」であり、親族であり、親しい近隣者でもあって、日系人もまた、その多くが先住民族社会の一員として彼らを理解し、受け入れようと努力し、その生活の基盤を築いていったことが分かる。

(2) 太平洋戦争による日系人社会の崩壊

しかし、こうした日系人の平和な生活も長くは続かず、1941年に太平洋戦争が勃発し、日本の真珠湾攻撃からわずか5時間後、日本がバギオ郊外のアメリカ軍基地に攻撃をしかけたことから、直接的には無関係のフィリピンもまた戦争へ巻き込まれていった。これにたいしアメリカ軍は、すぐにバギオ周辺に住むすべての日系人の拘留を決めたが¹⁷、その拘留も長くは続かず、やがて日本軍がバギオを占領すると、すぐに解放され、以前とかわらない生活を続けることができるようになった。しかしそのいっぽうで、現地の言葉と日本語ができる1世や2世は憲兵隊の通訳や現地の案内にと駆り出され〔郡司 1993、Afable ed. 2004〕、さらに、戦局が悪化してくると彼らにも徴兵が課されるようになり、軍人や軍属として戦闘への参加を余儀なくされた。1945年、日本の敗戦が色濃くなり、4月にバギオがアメリカ軍の手に落ちると、日系人たちはやむなく家を捨てて日本軍とともに山岳地帯へと逃げ込むが、敗走していくなか退路は断たれ食糧もなく、ここで多くの人たちが栄養失調や病気で命を落としていったという〔大野 1991 : 52-88、鴨野 2003 : 222-223〕。

終戦後、生き残った日系人は米軍の捕虜となり、やがて日本に強制送還された。しかし、この時日本へ行くことができたのは、そのほとんどが1世か、両親とも日本人の子どもたちで、もちろんフィリピン人を母とする2世も日本へ渡ることができたが¹⁸、実際には、戦時中、その多くが母や兄弟姉妹、妻子とともに山に避難していたか、軍属や通訳として家族と離れ単独行動となっていたかで、終戦時、日本に連れて帰る父がいなかった。あるいはフィリピン人の母親や妻を残して行くことができなかった、見知らぬ日本に行くことに不安を感じたなどといった理由で〔東京財団 2005 : 31-32〕、フィリピンに残留した。

こうして夫や父と別れフィリピンに残留した先住民族の妻やその子どもたちは、その後、苦難の生活を強いられ、日本軍の非道な行為に苦しめられたフィリピン人の報復を恐れ、激しい反日感情のなか日本名を捨て日系人であることを隠して生活しなければならず、母方の姓を名乗るなど、「アイデンティティ隠し」が広範に行われた〔Afable ed. 2004、飯島・大野 2010 : 37、大野 2008 : 134-136〕。また経済的にも、夫や父が残した財産はフィリピン政府や抗日ゲリラに没収され、戦後、返還されることはほとんどなく、困窮生活を強いられた。

戦前、日系人たちは北部ルソンに、他者である先住民族の女性を包摂し「想像の共同体」である日系人社会を構築したが、太平洋戦争の勃発と敗戦による戦後の強制送還に

¹⁷ この時、先住民族と結婚していた人々は親族や近隣の人々に匿われ拘束されずに済んだという。

¹⁸ フィリピン人を母とする子は原則として、①15歳以上の男性は父親とともに強制送還、②15歳以上の女性は日本に行くかフィリピンに残留するか選択、③15歳未満の子は父親が連れて帰る場合を除きフィリピンに残ると定められていた〔東京財団 2005 : 31-32〕。

よって敢え無く消滅してしまう。そのような状況において、戦前の日系人社会を語る人々の多くが日系人の父と先住民族の母をもつ、双方の文化を担うはずの2世、3世であるにもかかわらず、彼らの間には、日系人社会という「創造の共同体」を日系人社会たらしめる小道具としての「勤勉で忍耐強く、よく躰された日本人」というイメージが日本人のアイデンティティとして今も強く維持されており、多くの日系2世、3世が、ここでの生活のなかで父から学んだ勤勉さや忍耐強さによって、こうした悲惨な戦争や戦後の反日感情の吹き荒れる困難な時代を生き抜くことができたのだと述べるのである。

5. 戦後の日系人社会

(1) 日系人の組織化

上述のように、フィリピンに残留した日系人たちは、その後も激しい反日感情に晒され続けたために「アイデンティティ隠し」を行い、やがて、彼らが「日系人であること」が周囲の人々から忘れられていくが、1960～80年代にかけて反日感情が次第に薄れていくと、徐々に日系人が名乗りを上げるようになった。そして戦後、困難な生活を強いられた2世が中心となって、各地で相互扶助や日本に支援を求める日系人会を組織し、さらに1992年にはフィリピン日系人会連合会 (**The Federation of Nikkei-Jin Kai Philippines**) という全国組織も結成され、これによって「フィリピン全土の日系人の受難体験が相互認識され、「フィリピン日系人」というアイデンティティが共有化」されることになっていった〔大野 2007 : 85-86〕。

いっぽう北部ルソンでは1970年代に日系人探しが始まり、これによって多くの日系人が「発見」された。そして1972年にバギオの日系人による最初の会合が開かれ、翌1973年に北ルソン比日友好協会 (**Filipino Japanese Friendship Association of Northern Luzon**) を組織し、さらに1986年はバギオに日比親善友好会館アボン (**Abong**¹⁹) が開設され、そこを拠点に日本語教育や交換留学、技術研修生の派遣などの活動や、戦争中離れ離れになった父親探し、日本の親族との交流などを行うようになった〔大野 1991 : 52-88、東京財団 2005〕。

これらの忘れられた日系人が「日系人であること」の証明を行うのは、自身のアイデンティティの確認や父の消息を知りたいといった思いからであるが、それと並んで経済的要因、すなわち「豊かになった父の国日本で子どもたちが働くことができるようになる」といったことも、彼らの中では重要な部分を占める。そのため1990年6月に施行された改正出入国法²⁰によって日系2世、3世とその家族が日本で職種制限なく仕事が

¹⁹ 北部ルソンのリンガフランカであるイロカノ語で「家」を意味する。イロカノ語自体はルソン島北部の西海岸に住む低地キリスト教民のイロカノ族の言語である。

²⁰ 「日本人」でない申請者が親か祖父母が日本人であると示すことによって、就労を含め

できるようになると、北部ルソンでは「日系人であること」を法的に証明することが彼らにとって何よりも重大な関心事となっていき、そのアイデンティティ²¹がより意識されるようになっていった。しかし、自分たちが日系人であることを証明するためには、父親の戸籍にその子どもとして自分の名前が登載されていることが必要であり、実際には、たとえ父親の身元が判明しても、戦前、戦中の輸送事情、戦災による報告の不到達等などによって 2 世の名前が戸籍に載っていることは少なく、その場合、父親の戸籍がある自治体に戸籍への登載手続きをしなければならない。いっぽう戸籍がない、あるいは戸籍の所在がわからない日系人については、さまざまな証拠をもとに家庭裁判所の許可を得て新たに本籍を設定し戸籍を作成する「就籍²²」も可能である。ただし、これらの作業にも両親の結婚証明書や自分の出生証明書などが必要であり、フィリピンに残留した日系 2 世は、そのほとんどが長い間、日系人の夫や父親との関係を隠して生きてきたため、それを証明できるような書類がない者が多い。そのため、今なお身元のわからない残留 2 世は 800 人以上に上るといふ。

これにたいし、善意の企業主や個人、日本の民間ボランティア団体などの協力で運よく身元や戸籍の確認ができたり、戸籍への登載が認められたりした日系人は、先の改正出入国法の施行によって定住ビザを得ることができた。また戦後、日本の親族と交流があった 2 世のなかには、彼らの協力を得て日系人であることを証明することができ、今や彼らは日本各地の労働現場で「日本経済と日本人の暮らしを支えている」という。いずれにせよ、さまざまな手段によって身元が判明した日系人は日本への出稼ぎを通してフィリピンの家族の生活を向上させることができたが、依然として身元を証明することができない日系人も多くあり、ここに日系人社会内の格差が拡大しつつある。

なかには日系人労働力に目をつける仲介者や斡旋業者に戸籍探しや在留資格証明書の取得を依頼する者もあるが、しばしば騙されたり、入国後に法外な斡旋料を給料から天引きされたりするといったことが起きている。また、戸籍の売買の仲介や純粋なフィリピン人の日系人成りすましをする者が現れるなど²³、「日系人であること」の証明を

日本での活動に制限がない「定住者」の在留資格を取得することが可能になるとともに、非日系人であっても 3 世までの配偶者の場合、日系人と同様な特別の在留資格を獲得することができるようになった。この定住ビザは就労に関する制限がなくなるため日本人と同様、どんな仕事でもできるというメリットがあるが、永住ビザと異なりビザの更新手続きが必要である。

²¹ ここでいうアイデンティティの確認とは「自己同一性」の確認というよりも日系人としての「身元が明らかになり、国籍が確認される」ことであり、それはまた日本への出稼ぎが可能となることを意味している。

²² 戸籍がない、あるいは戸籍の所在がわからない人が、家庭裁判所の許可を得て新たに本籍を設定し、戸籍を作成すること。中国残留孤児ではすでに多くが認められているが、フィリピンでは 2006 年に初めてこれが認められた(フィリピン日系人リーガルサポートセンターHP <http://pnlsc.com/>、2015 年 12 月 25 日アクセス)。

²³ 2004 年 5 月には 13 人のフィリピン人が日系人に成りすまして日本に入国したことが発覚し、強制送還されている〔東京財団 2006〕。

めぐっては依然として多くの問題がある〔東京財団 2006〕。

また、たとえ日系人であることが証明され日本で働くことができるようになっても、彼らの日本での生活は決して楽なものではなく、そこには日本語能力や情報の不足、家族との分離による孤独、困難な業務の内容、日本人との待遇格差、派遣という不安定な雇用形態など、さまざまな問題が山積している。それでもなお生活向上への近道である「日本への出稼ぎ」は後を絶たず、そういった意味においては、在比日系人にとって日本は生活の楽しみよりも、より大きな収入を得ることを優先させる場所であり、日本への出稼ぎは「日系人の家族の基本的な必要を満たすための努力、犠牲的な行動である」といえる〔東京財団 2006 : 108〕。さらに「世代格上げ (grade up)」といった現象も生じており、これは 2 世が日本人の子として独立した戸籍を作成して法的に日本国民、すなわち 1 世となり、それによって自動的に 3 世が 2 世に、4 世が 3 世に繰り上がる、つまり格上げされることで、これまで自由に日本で就労することができなかった 4 世が法的に 3 世となるという行為で、これが日系人社会では盛んに行われている。この「世代格上げ」は、日系人社会の中でもフィリピンだけで顕著に起きている特異なもので〔飯島・大野 2010 : 39-40〕、このことから、彼らの日本にたいする思いはもはや「あこがれの父親の故郷」ではなく、出稼ぎに行く場所となっていることが分かる。

6. おわりに

フィリピンの国籍については、1935 年の憲法から、それまでの出生主義に代わって父系優先血統主義がとられるようになり、当時の日本もまた父系優先血統主義（1960 年改正）であったため、当時の日系人は必然的に日本国籍を有することとなった。もちろん母がフィリピン人の場合は一定の年齢に達したときフィリピン国籍を選ぶこともできたが、先住民族社会で「日系人」として生きてきた彼らにとってフィリピン国籍を選ぶという選択肢はその時なかったに違いない。そのため、後の 1973 年憲法でフィリピンが父母両系血統主義に代わると、結果的に、この狭間に生まれた日系 2 世たちのあいだにフィリピンからも日本からも国籍を認められない「無国籍」の人々を生み出すこととなった。もちろん、たとえ無国籍であっても 2 世たちがフィリピンで先住民族として生活したり、日系人であることが証明された「フィリピン人」の 3 世が日本へ出稼ぎに行ったりすることに何ら支障はないが、1990 年に出入国法が改正され日系 2 世、3 世とその家族が日本で職種制限なく自由に仕事ができるようになると、事態は変わってくる。フィリピンでは、これまで日本に出稼ぎに行くことのできなかった 4 世を 3 世に繰り上げるために 2 世の「格上げ」をするようになるが、これを行うためには 2 世が日本へ行って戸籍を作らなければならないわけで、しかし無国籍である人々は日本へ渡航するための「日本人としてのパスポート」はもとより「フィリピン人のパスポート」さえ作ることができない。また、たとえ「日本人」にならなくても、父の故郷を訪ねてみたいとか、日本で働く子どもたちを訪ねたいといった願いすら叶えることができず、こ

うした機会を通して、彼らは自分たちが「無国籍者である」ということを認識するようになっていった。いっぽう現在、北部ルソンには2世から5世まで約1,300人の日系人が暮らしているが、1990年の出入国法の改正によって今ではその多くが家族とともに日本へ出稼ぎに行っており、そのフィリピンに残された家族の生活を支えている。しかし彼らの日本での生活は、日系人というよりも「フィリピン人の出稼ぎ労働者」のそれに過ぎず、そこにさまざまな問題を抱えている。

第2次大戦後、アジアでは多くの植民地が独立したが、現在でもさまざまなところで植民地的状況が消し難く存在しており、そのような状況において、現代の問題は植民地主義と決して無縁ではないだろう。しかしながら、ここで問題となるのは過去の歴史ではなく「現在の歴史性」であり〔山下・山本 1997: 13-15〕、フィリピンにおいてもまた、こうした植民地的状況は随所にみられるが（cf. 清水 1998）、フィリピンの日系移民の歴史を国際移民労働といった観点からみると、それが現代の問題とも密接に関係していることが分かる。そのような意味において、「人の移動やそれにかかわるアイデンティティ」を植民地主義の歴史の局面とその後の世界情勢の変化から捉えた本研究は、移民に関する歴史人類学的な研究にとどまらず、現代的な問題を考えるうえで大きな示唆を与えるものに違いない。また、これら日系人社会の歴史を正しく理解することは、今後、近隣のアジア諸国とより良い関係性を構築していくうえでますます重要となるが、残念ながら戦前の北部ルソンでの暮らしを知る日本人や先住民族を母親とする日系2世の多くがすでに亡くなっており、こうした状況において、彼らの経験や彼らが3世、4世に語った日系人の歴史を記録し保存する本研究は、現代社会に生きる我々にとっての責務であり、それを失われた過去とさせないためにも、本研究は注目に値するものである。

最後になりましたが、本研究にあたっては、公益財団法人JFE21世紀財団による「アジア歴史研究助成」の交付を受けました。ここに記し、心より感謝申し上げます。

<参考文献>

Afable, P. O.

2004a Introduction. In *Japanese Pioneers in the Northern Philippine Highlands*. Afable, P. O. ed., Filipino-Japanese Foundation of Northern Luzon Inc., Baguio.

2004b Building Bridges in a Faraway Place: Japanese Pioneers in Baguio and Benguet History. In *Japanese Pioneers in the Northern Philippine Highlands*. Afable, P. O. ed., Filipino-Japanese Foundation of Northern Luzon Inc., Baguio.

Afable, P. O. ed.

2004 *Japanese Pioneers in the Northern Philippine Highlands*. Filipino-

Japanese Foundation of Northern Luzon Inc., Baguio.

Botengan, K. C.

2001 *The Episcopal Church in the Philippines: 1901 to 2001*. The Episcopal Church in the Philippines.

Commission of the Census, Commonwealth of the Philippines

1940 *Census of the Philippines, 1939*.

ダバオ日本人会

1993 「移民の体験」『収録「ルソン」』佐藤喜徳編、第 55 号、比島文庫。

Furuya, H

2004(1939) Hideo Hayakawa, Pioneer Resident of Baguio. In *Japanese Pioneers in the Northern Philippine Highlands*. Afable, P. O. ed., Filipino-Japanese Foundation of Northern Luzon Inc., Baguio.

外務省通商局

1911 『移民調査報告 第六回』雄松堂出版。

外務省領事移住部

1972a 『わが国民の海外発展：移住 100 年の歩み（本編）』外務省。

1972b 『わが国民の海外発展：移住 100 年の歩み（資料編）』外務省。

郡司忠勝

1993 『思い出はマニラの海に』三月書房。

Hamada, S.

1983 The Japanese In and Around Baguio Before the War. In *MEMORIAL: The Japanese in the Construction of Kennon Road*. Filipino Japanese Friendship Association of Northern Luzon, Baguio.

Hayase, S.

1984 *Tribes, Settlers and Administrators on a Frontier: Economic Development and Social Change in Davao, Southeastern Mindanao, the Philippines, 1899-1941*.

Ph.D. dissertation, Murdoch University.

早瀬晋三

1989a 「アメリカ植民地下初期（明治期）フィリピンの日本人労働」『世紀転換期における日本・フィリピン関係』池端雪浦・寺見元恵・早瀬晋三、AA 研東南アジア研究第 1 巻、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

1989b 『「ベンゲット移民」の虚像と実像』同文館。

1996 「ダバオ国」の在留邦人『日本占領下のフィリピン』池端雪浦編、岩波書店。

飯島真理子・大野俊

2010 「フィリピン日系「帰還」移民の生活・市民権・アイデンティティ：質問票による全国実態調査結果（概要）を中心に」『九州大学アジア総合政策センター紀要』4：35-54。

蒲原廣二

1938 『ダバオ邦人開拓史』 日比新聞社。

金ヶ江清太郎

1968 『歩いてきた道—ヒリッピン物語—』 国政社。

鴨野守

2003 『バギオの虹』 アートヴィレッジ。

カーズルズ S.・M. J. ミラー

2011 『国際移民の時代』 関根政美・関根薫訳、名古屋大学出版会 (*The Age of Migration: International Population Movements in the Modern World*. 4th Edition, 2009)。

小島勝

1993 「第二次大戦前の日本人学校教員の教育体験・意識に関する教育—バギオ・満州・上海における教員への聞き取りを通して—」『龍谷大学論集』第 443 号:77-108。

三吉朋十

1942 『比律賓の土俗』 丸善。

森谷裕美子

2004 『ジェンダーの民族誌』 九州大学出版会。

2012a 「フィリピン・北部ルソンにおける日系人」『九州産業大学国際文化学部紀要』第 53 号:107-126。

2012b 「フィリピン北部ルソン日系人社会の歴史的位相」『南島史学』第 79・80 号:144-159。

2013 「フィリピン北部ルソンにおける日系人と「イゴロット」の関係性」『九州産業大学国際文化学部紀要』第 53 号:107-126。

2014a 「フィリピン・北部ルソン社会における日系人のアイデンティティ」『九州産業大学国際文化学部紀要』第 57 号:65-85。

2014b 「植民地支配が先住民族社会に与える影響」『南島史学』第 82 号:59-71。

2015 「フィリピン・先住民族社会における日系人の受容と排除」『九州産業大学国際文化学部紀要』第 61 号:69-89。

2016 「フィリピン日系人社会におけるジェンダー表象」『明治大学政経論叢』第 84 巻第 3・4 号 (印刷中)

OECD

2013 *International Migration Outlook 2013*. OECD Publication.

大野俊

1991 『ハポン—フィリピン日系人の長い戦後』 第三書館。

2006 「「ダバオ国」の沖縄人社会再考—本土日本人、フィリピン人との関係を中心に—」『移民研究』第 2 号:1-22。

2008 「異民族結婚した移民一世とメスティーソ二世」『ジャパニーズ・ディアスポ

- ラ』足立伸子編著、新泉社。
- ラファエル、ビセンテ L.
- 2004 「アメリカ植民地と異文化体験」『フィリピン歴史研究と植民地言説』永野善子編・監訳、めこん。
- 清水展
- 1998 「植民地支配の歴史を越えて」『アジアの多文化社会と国民国家』西川長男、山口幸二、渡辺公三編、人文書院。
- Scott, W. H.
- 1969 *On the Cordillera*. MCS Enterprises, Manila.
- 鈴木讓二
- 1992 『日本人出稼ぎ移民』平凡社。
- Tamayo, A. L
- 2004 Culture and Everyday Life in the Japanese-Filipino Community. In *Japanese Pioneers in the Northern Philippine Highlands*. Afable, P. O. ed., Filipino-Japanese Foundation of Northern Luzon Inc., Baguio.
- Tapang Jr., B. P.
- 1985 *Innovation and Social Change: The Ibaloy Cattle Enterprise in Benguet*. Social Science Monograph Series 5, Cordillera Studies Center, University of the Philippines Baguio.
- 東京財団
- 2005 『フィリピン日系人の法的、社会的地位向上に向けた政策のあり方に関する研究』東京財団研究報告書。
- 2006 『フィリピン日系人支援の方策についての研究—両国におけるアンケート調査を通じて』東京財団研究報告書。
- United States, Bureau of the Census
- 1905 *Census of the Philippine islands, taken under the direction of the Philippine commission in the year 1903*. Vol. 1.
- Villarba-Torres, A. K
- 1991 Fas-Ang: Cross-Cultural Currents in the Literature of Sinai Hamada. *Philippine Studies*, Vol. 39: 135-157.
- 山下晋司・山本真鳥編
- 1997 『植民地主義と文化』新曜社。
- 矢野暢
- 2009a (1975) 「南進」の系譜」『「南進」の系譜—日本の南洋史観』千倉書房。
- 2009b (1979) 「日本の南洋史観」『「南進」の系譜—日本の南洋史観』千倉書房。
- Yu-Jose, L.
- 1997 Japanese OCWs to the Philippines. *Philippine Studies*, Vol. 45-1: 108-123.